豊かな二学期

協力の姿

南　信子

一、協力、協同的行動

協力という言葉は美しい。それは人間が相より相助けて生きる姿を思うからである。協力ということは特に目新しい概念ではない。目標達成のために人間が力をあわせ、協同的行動をなすことを意味しており、誰でもがすぐに一応理解することができるほど、対人関係における極めて一般的な要素である。人間が社会生活を営む上に不可欠の問題であるともいえよう。

協力の世界には平和があり、人間関係は友好的となり、相互に他者をみとめ信頼し、コミュニケーションも活発となる。協力のない世界では人間は孤立するか競争的な対立の立場においやられることが多い。しかし自主性や創造性のない主体が従属的、追従的に他に協力的である場合はこれを真の協力ということができない。

また目標が望ましくない場合には、そこにどんな協力があろうともそれは無価値であり有害であることは当然である。真に協力するためには正しい意義のある目的のために力をあわせ、心を一つにして相互依存的に行動する価値を認識することが必要であり、そこには高い人格的発達が期待されるのである。

よく人はあの人は協力的あるいは協調的な人であるという表現をすることがあるが、それがその人の生得的な性格的特徴であると考えるのはいささか問題がある。この点に関していくつかの研究があるが、それによっても、人間が競争的であったり、協力的であったりするのは、生まれながらの特性によるものではなく、

その人の住んでいる国の文化と社会的要因によって規定されていると実証している。

また協同的行動が人間にどのように発現するかについては、人間の心理的生理的成熟の過程にあらわれるとする研究が多い。子どもの遊びを観察しても、二、三歳児ではまだ一人遊びや平行遊びが多く、協同的遊びが盛んになるのは四歳を過ぎてからである。しかしこの状態もゴットシャルトの研究によると、幼児が他の子どもと遊ぶ機会が多ければ多いほど、協力することを学ぶことも多く、教育的影響によって学習していく態度であるとしている。子どもは自然には誰とでも協力できるようには成長発達しないが、さまざまの経験のなかで協調的であり、協力することを学んでいくのである。

この観点に立つとき、家庭はもちろんであるが、集団生活の場である幼稚園生活は、子どもが他の人と協力することを学ぶために価値の高い機会を提供するので極めて重要である。

また子どもが他の人と協力できるようになるためには、ある程度の言語が発達し、行動によって自己表現ができ、さらに自己統制力をもち、種々の役割行動がとれなければならないのである。また他の人の気持がわかり、他の人と共に活動する喜びを知り、一つの共通の目標のために行動する意識が育ち、集団の場合には、その中で約束や規則を守る態度も必要となってくるのである。

幼稚園においては入園当初はこのことを期待すべくもないが、二学期を迎えると子どもたちは自然に落着いて、まわりの友だちに対して愛情と信頼感をもち、遊びの中で協同的な遊びを展開し、協力する姿をしめしはじめるのである。そこに教師の果たす役割も大きい。初めは素朴な倫理として感覚的次元において感じさせながら、やがて成長とともに自覚的実践的な行動として、協力する態度を育てることが大切である。

日本の現在の社会では対人関係において協力することを学ばせるよりも競争するようにかりたてる要素の多いことを痛感するが、協調性や、協力する態度は、幼児期の間に人格構造の中に形成されることが望ましい徳性であると信ずる。

二、環境

④自由遊び

協同的行動の発達にとって自由遊びの時間はかけがえのないときである。さまざまの遊びの中で自然に他の人と交わる機会が与えられているからである。

けんかがおこることもしばしばである。他の人に妨害されて遊びを中断させられることもある。

玩具のとりあいに勝利をえたとしても、次には他の子どもから暴力がおそってくることも経験しなければならない。しばらく一しょに積木をつんでいても考えがちがってくるともはや子ども同士では解決を見出せない事態に直面するかもしれない。しかしこういった環境そのものが彼らに他者の存在を認識させ、彼等自身の自己発見の機会ともなり、自己表現と自己統制力を学ぶ時となるのである。

成長とともに自分の能力も少しずつわかり、他の人の気持も理解できるので、共通した興味で一しょに遊ぶことが可能になり、一人で遊ぶよりも、他の人と遊ぶことが楽しいことや、自己主張的行動をするよりも協同的行動をすることが望ましいことも遊びの中で経験するようになる。五歳児ともなれば友だちなくして幼稚園生活は考えられないほど、交友関係による楽しい経験を期待し、集団意欲も盛んになり、相互依存性も強くなる結果、自由遊びの中でも一つの目標のもとに協同的遊びを展開することが多くなるのである。役割を分担することや、話しあいをして意見を交換することもできるようになる。

制作を協同で行なったり、ごっこ遊びも組織的にし、目標達成への意欲も盛んとなる。こうして自由遊びは子どもの自発性と創造性開発のためにかけがえのないときであると同時に、子ども同士の友好関係をつくり、協同的行動を発達させるためにも重要な意味をもっているのである。この自由遊びをいかに発展させるか、いかに価値あるものとするかは教師の双肩にかかっているといえよう。

㈤あたたかい雰囲気

子どもが協力することを学んでいくためには、まずその雰囲気があたたかいものにつつまれていることが大切である。愛情、信頼、他者の尊重、規律、協力などの素朴な倫理が幼稚園全体の環境の中に流れていることが必要である。子どもたちは無意識のうちに、またそのするどい感受性によってそれを感ずるのである。協力しなさいと教えることよりも生活の中で感じさせることが大切なのである。

小さな子どもでも他の人のために何かする能力を与えられているのである。また幼児は幼児なりに相手の喜びや悲しみを自然に感得できるのである。二人でままごとをしているのを見るとちゃんとお母さんと子どもになって満足して遊んでいるし、積木遊びをする子どもたちもかわるがわる積木をつみ、おそい子どもがいると待っているのである。

しごとの後片づけをするときに大きな机を一人の子どもがひきずっていると他の子どもがこれを自然に助け、子どもが机の上を

ふくときには上にあるものを他の子どもがもちあげている。エプロンのうしろのボタンをとめるのを他の子どもが助ける。一人の子どもが何か失敗してもみんなが同情して励ます。能力のない子どもも自然に仲間に入っている。子どもが欠席するとみんなが心配そうにするなど、何となくあたたかい雰囲気がただよい、そこに愛情と信頼感がみちあふれているところに協力の芽生えは培われるのである。

クラスに困った問題がおこった時には教師も子どもも一つになってみんなで考えてきまりをつくるところに集団の一員である意識もたかまるのである。こうした子どもたちのもつ素朴な倫理をより高く豊かなものとする責任を教師はもっているといえよう。

三、教師の役割

㋑発達に即した指導をすること

幼児に協力することを学ばせるためには、その前段階の充実をはかることが必要である。即ち協力できる前に幼児は自分の遊びを一人で没頭して楽しむことができなければならないのである。誰からも犯されることなく、すきな遊具で安心して自由に遊べる経験を十分にもっていることが大切である。いつも玩具を他の子どもにとられるかもしれないという不安をもっていたり、自分のほしい玩具がいつまでたっても手に入らないのでいらいらしているような状態ばかりが続くと、やがて協力を学ぶ時期がきても円満にこれを伸ばしてやることが困難になる。

一人遊びの中で自発的創造的に遊びを展開できる能力をまずつけてやることが大切なのである。そうすればやがて協同的遊びの中で十分に自分の役割をもち、グループのために貢献するであろう。またすでに他者の意識が育つ段階がきているにも拘らず、ひとりっ子などで親の過保護のもとで育ったような子どもは自分の欲求不満を統制することを学んでいないために協同性の発達もおくれがちになることが多いのである。

㋺協力する機会を与えること

教師は子どもたちに協力して遊ぶ楽しさを経験するように機会をつくってやることが大切である。次の例は私のナースリースクールでの経験である。

治夫は今まで一人でよく遊んでいたのに一週間前からあまり遊ばなくなり、すぐに他の友だちを泣かせてしまう。

今日もすぐ近くにいた恵子が泣いているので「どうしたの」ときくと「治夫ちゃんがいじめた」という「治夫ちゃんがどうしたの」ときくと「私の目に指をいれた」という。

すぐ治夫に「友だちの目に指をいれる子はお友だちと一しょに

おれないの」とはっきりいって別室につれていきしばらく一人にしておいたが落着いてきたのでもとの部屋に帰り「さあ先生と一しょに絵本をみましょうか、恵子ちゃんもね」とさっき泣いた恵子を近くにつれてきて絵本を見たが暫らくして「今度は治夫ちゃんと恵子ちゃんとパズルをしない？」とパズルをしはじめると、さっと両方から手がでて一つのパズルをしはじめる。「まあ治夫ちゃんと恵子ちゃんと二人でするとうまくできるわね」とびっくりしてみせる。二人で顔をみあわせて、ニコッと笑い出し、さっき泣いたこと泣かしたことなどすっかり忘れたようなようすである。

これは三歳児のナースリースクールの自由遊びの一場面であるが、この年齢の子どもたちは素直にこうした協力の場をもつことがしばしばである。こんな経験をいろいろの遊びの中でいくどもつみかさねてやりたいものである。そのために教師が機会をつくってやることが大切なのである。

㈧自覚的実践的に協力を学ばせる

成長発達にともなって協力することも自覚的実践的に学ばせることが必要となってくる。子どもは子どもで遊ぶ楽しさを知ることができたとしてもそれは事態が思うように運ぶ限りにおいてであり、なかなか望ましい協力の姿は容易にあらわれないのは当然である。意見の対立、競争相手の出現などによって、ある子どもは攻撃的となり、自己主張を固執したり、反対にある子どもは消極的で追従的となる。こうした場合に教師はただちに命令したり、早く最良の答を出すよりも、子ども同士で思考させ、話しあわせることが大切である。たとえ時間がかかっても子どもたちが少なくとも自分たちで問題解決の道を発見しようと努めてから教えられるほうが協力することを学ぶ過程として効果的である。自覚的実践的に学ぶからである。

もちろん幼い子どもたちであり民主的な解決ができるかどうか教師のあたたかい愛情と配慮が子どもたちにそそがれていなければならないし、子どものがわにたって考えてやれる教師でなければならないのである。そうして子どもたちが徐々に、自分の考えをはっきり相手に伝えることや、ときには自分の気持をおさえて相手を受けいれることを学び、問題解決の方法を自分たちで見出し、それによって友だち同士の近親感を深め、真に協力する喜びを経験するようにしたいものである。

㈨共通の目標を発見させる

子ども同士の中に共通の目標を発見させることが協力することを学ばせるために効果的である。彼ら自身が共通の目標を発見するように導かれるとよい。次の例は私の園であった五歳児のクラスの経験である。

教師が部屋の真中にボールトとナットを使用して組立てることのできる積木で船の枠ぐみをつくっておいたのがきっかけとなり、子どもたちはそこに集まってきて船遊びを展開した。

船の中に食堂ができ、コックが選ばれ、望遠鏡をつくって船にのりこむものがおり、しまいには鯨捕りをはじめたり、話しあって船に名前をつけたり、ついに他の組の子どもを招待するために切符や食堂のご馳走をつくって歓迎するなど、遊びは一週間つづき、クラス全員が参加したのである。その過程において子どもたちはさまざまの経験をしたが、船をつくるためには幾人かの協力が必要であったし、船ができ上がってからは、船長、船員の役割りをきめる必要があり、役割りの分担やゆずりあうことが話しあわれたり、日頃リーダーのようになって行動したりすることのなかった子どもが良いアイデアを出したり、クラス全員が協力して遊ぶよい機会となったのである。この遊びの発展の背後に教師の助言や示唆があったことはもちろんであるが、遊びそのものが、子どもたちの共通の興味をそそるのに十分魅力的であったことが考えられる。教師は絶えず子どもが力をあわせて遊ぶことのできる興味や話題を知り、そのための環境をととのえ、彼らの能力にあった遊びを協同で展開していくように助けることが大切である。協同制作、劇あそび、ごっこ遊び、ゲームなどそのために適切な経験は数えきれないほどである。

㋭結果よりも過程を重んずること

協同的行動はある目標のためになされる場合が多いが、目標はまたその過程のために計画されることも多い。特に幼児の場合には目標を達成することよりもその過程を重んずることが大切である。絵をかいたり制作をする場合でも、その結果を評価することよりも、子どもが内にある感動をいきいきと表現することそのことが意味をもっているのである。おとなの目から見ると他愛のない遊びであっても、その過程においてそれぞれの子どもがその子どもなりの自己表現をなし、創造性を働かせ、役割りを分担して協力し、一つの遊びを展開する楽しさを味わうところに無限の価値があるのである。

㋬協力の美しさに気づかせること

最後に注意すべきことは協力の美しさを子どもたちに気づかせることである。建築物にしても、音楽にしても多数の人々の考えと力とが一つにならなければ到底できあがらないものであることに目をひらかせるように指導したいものである。幼い子どものたましいにこうしたことはむずかしいことであるが、家庭も幼稚園も社会もすべてが力をあわせることができればさほど困難なことではないと思う。

（北陸学院短期大学）